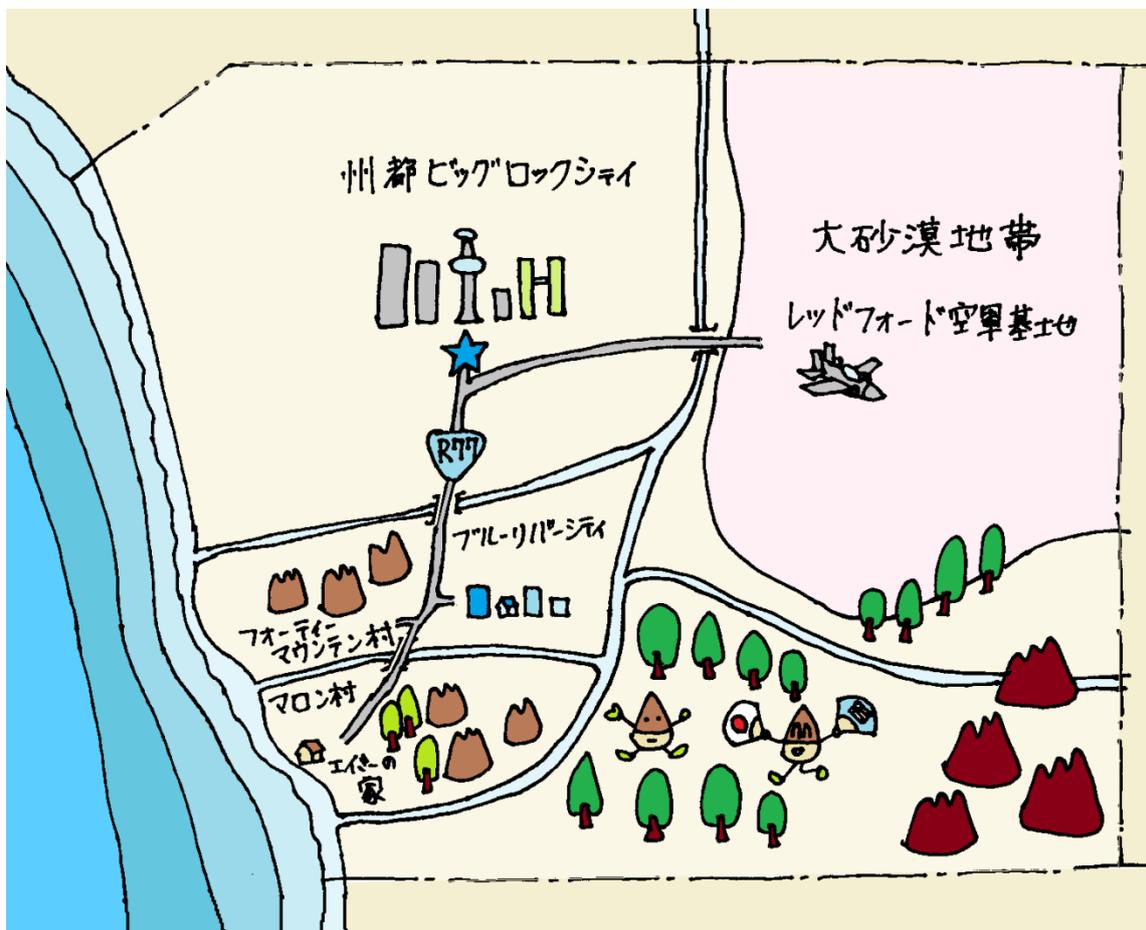


第1章 スイカのぼうしを作ろう

トマトができない

「おい今年のトマトはどうじゃな？頭の良くなるトマトはできたかな？」

マロン村とブルーリバーシティのまん中に、フォーティーン・マウンテン村があります。この村はマロン村より少し小さく、小さな川がたくさん入りこんでいます。



この広い畑の中にビルのような高い温室があったり、地下に畑があったり一風変わった研究所がありました。そこがアムシュタイン

10次元脳業研究所です。所長のクーニー・アムシュタインを友人が訪ねてきました。

「ハイ、変人クーニー。いつも通りまたそのカーボーイハットかい？」

「はははは、脳業じゃよ。脳業！ワシは野菜のカーボーイじゃでのう。ところでこの孫に作ったてんとうむしのバイオカップはどうじゃな」

「空が飛べたらすごいな」

「そのつもりじゃよ、はははは」

アムシュタイン所長はいつもの笑顔で答えました。

「しかし今年はトマトが不作での」

友人は元気のない口調でいいました。

「ああ世間はそうらしいなあ。そりゃしょうがないぜ。自然にあわせ野菜作ってりゃ、どうしても影響されちまうわな」

アムシュタイン所長は、かぶっているカーボーイハットを取り、友人の前で見せながらいいました。

「どうだこれは？」

そうやってそばにいる研究員を呼びました。

「なんだこりゃ？変な野菜のデザインだな？」



「そうだ、野菜ができる帽子だ。今、こうしてなすを作ってるところじゃよ」

アイムシュタイン所長は自慢げに話します。

「ただの飾りだろそんなの？本物の野菜ならすごいけどな」

友人はそう言って、帽子の野菜を触りました。

「おい、本物かい？でもすぐに枯れちゃうだろ？」

「帽子の中に根が生えているんだ。少し栄養が良くてでかくて重いがな。正真正銘の生きた野菜だぜ」

「まったく、お前さんには頭が下がるぜ。でも売れなきゃなんにもならないだよ」

「まあ、そんなことはいい。で何の用事だったんだ？」

「そうなんだ。今年はトマトの出来が悪い。何度も花が咲くがすぐ枯れてしまう。もう2度も苗を植え替えただよ」

友人はそう言ってため息をつきました。

「そうだな。去年より気温が高く、そのせいで虫の発生が多いな。媒介するウィルスの病気じゃな」

アイムシュタイン所長は野菜のカーボーイハットを、両手でかぶりなおして言いました。



「もう6月だ。この調子では一番収穫のできる夏は全滅だぜ。本当にクーニーのいうように、地下で野菜を作った方がいいな」

友人は両手を広げて、もうダメだという仕草でいいました。

「自然が相手だ。いたちごっこじゃな。ウィルスを殺す薬を捲いても、次はもう効かん。自然はそういうもんじゃで、しかたないじゃろ。昔このあたりもハリケーンでひどい目にあっただな」

アイムシュタイン所長は、何度も帽子に実っている野菜を触りながらいいました。

「しかし、ウィルスだけじゃない感じだな。葉がやられ実ができん。じゃがしなびたような、小さい実がなるのは不自然なんじゃよ。普通、ウィルスなら実はならんからのう」

「クーニー、とにかく調べてくれんか。このままじゃ破産だだよお」

「わかったよ。もう調べているよ。ただ後1カ月、最低でも3週間くらいは見ないとな」

「ありがと、クーニー。本当に博士のようだな。次は早く頭の良くなる帽子を作ってくれ。俺の孫にかぶらせたいでのお」

友人は少し安心した顔で、手を振って帰って行きました。

【博士じゃないよ、わしゃ、どん百姓じゃよ】



アイムシュタイン所長は、笑いながら友人を見送りました。

【わしゃ、どんびやくしょうじゃよ】

そう話すことが口癖な彼は、高校を卒業しても大学へも行かず遊んでばかりいました。その時この地方を大型のハリケーンが襲いました。小さな川が多いので周りは海のようになり、多くの死者が出ました。まだ若かった彼は水に浮かぶ水草の根を見ました。



【はて？この草は生きている？】

そこで土を使わず水だけで農業をすることを思いつき、それからというものの、半分は自然を避けヒューマンの力で、残りの半分は自然の力を借りて、一風変わった農業を研究し実践する日々が続いています。

【葉は何ともなく花ができ実ができるがしなびるとは。やっかいな病気じゃて】

彼は自分のトマトを見つめながら、そうつぶやきました。

宇宙人の襲撃

同じ日曜日の午後、バーバラとトミーは不思議な雑木林に近いエイミーの家に集まっています。3日前の木曜日の満月の夜にトナ、デコ、レタたちがヒューマニワールドにやってきたのですが、泊るところも何もありません。まだ彼らの食糧もビッグドラゴンフライも別のフレンズも、不思議な雑木林の中に隠した汽車の中で身を潜めています。

『ほんとうにレタも行き当たりばったりなんだから』

トナとデコがエイミーの家に入るなり大きな声でいいました。

「どうしたの、トナさん、デコさん」

エイミーがトミーに連れられて家に入ってくるトナとデコに向かって言いました。

『だってさ、レタってなんにも準備していないのよ、ねえ、デコ』

『んなこといってもさあ。この間来た時オラッチは林の中で留守番してたしさ』

「まあまあ、そんなに喧嘩しないでさ。さあエイミーの家にはいつてよ」

トミーがトナたちをエイミーの家に誘いました。

『なんだかきたないところ・・・、いやきたことのないいい家トナ』

トナがあわてて言い直すのをエイミーがいました。

「いいのよ、トナさん。だってフレンズの家は草のベッドだし匂い
がいいもの」

『他の人にばれたら大変だからここにいるしかないポン』

デコもトナの顔を見ていました。

「とにかく座って今後の事をお話ししましょ」



エイミーは普通ならリビングに通すところを、使わなくなった納屋
に置いてあった切り株を囲みみんなを座らせました。

「ところでレタ君さあ。また聞くけどトナさんもデコさんもみんな
すごい年だよ。おいらたちの大人よりもっと大人じゃんかよ。子供

より大人の方が頭もいいしき、大人の女神さんや勇者の方がいいはずだよ」

トミーがレタに質問しました。

「わたしも一度聞きたいと、そう思っていたところよ」

バーバラもトミーの顔を見ながらいいました。

『それじゃあ、話すことにしよう。少し長い話になるけどニ。大昔のことだがずいぶん多くのレタチンやトナトンがダメになったんだニ。そこで今回のようにヒューマニーワールドに調査に行つたと教科書に書いてあるんだ』

「あのフルタニア百科事典ね、わたしの家にも同じようなのがあったわ。フー」

バーバラがため息交じりにいいました。

「それでどうしたの？」

エイミーもレタに質問しました。

『実は昔の話だけど、他の星の宇宙人にヒューマニーワールドが攻められたんだニ。彼らは我々の時空のことは知らなかったみたいだニ。頭を狂わす電波兵器を使って、ヒューマンを全滅させようとしたらしいだニ。その時それがオレッチのワールドの地磁気マインドに影響したんだ』



「こわいお話・・・」

バーバラがエイミーの顔を見ていました。

『そこで我々はヒューマンを助けようとして、その電波を打ち消すテレビゲームのような道具を大人に渡したんだ』

「面白そうな展開だね。おいらそういうの大好き」

『でも大人は誰もこわがって使わないんだ。それを見ていた子供たちが集まってきた。見よう見まねで操作したんだ』

「どんな宇宙人だったの？」

『虫みたいに小さくて、宇宙船がなくても、宇宙を飛ぶことができるらしい。バッタみたいなヤツだな』

「変な宇宙人ね」

バーバラが言いました。

「で、やっつけたの？」

『それが、すごい大群でやっつけても、やっつけても、やってくる』

「こ、こわいね・・・」

『大人は見てるだけで何もしない。子供は逆に面白がってゲームみたいに、撃ち落としていたんだ。でもすごい数なので我々も手に負えなくなり非難したんだ』

「それじゃあ、ダメじゃない・・・」



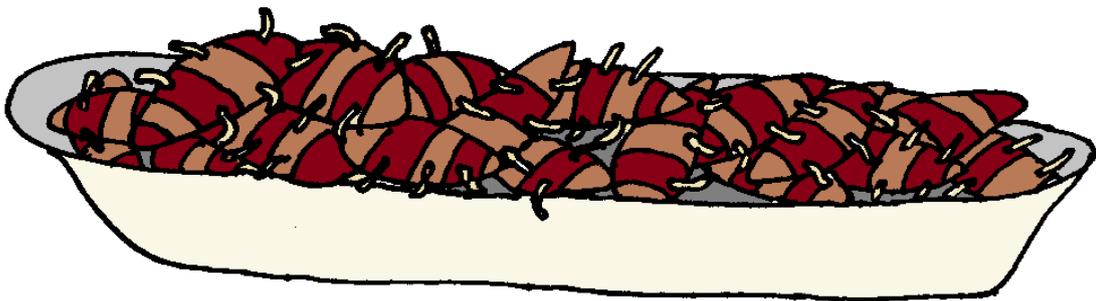
「それでどうなったの？」

『大人が虫取り網を持ってきて捕ろうとしたんだ。そうしたらそれを子供たちがまた面白がって、網を持って次から次へ捕まえたんだ。結局、宇宙人はヒューマンの子供によって、いっぱいカゴに捕えられてしまったそうだ』

「それで、結局どうなったの？」

エイミーが言いました。

『みんなで焼いたり煮たりして食べちゃったってさ。それで大人より子供の方が役立ったって我々の教科書には書いてあるんだ』



「意外と単純な理由ね。わたしも帰ったら百科辞書を見してみるわ」

バーバラもエイミーを見てため息交じりに言いました。

「なんかレタ君たちって本当に頭がいいのか、わからなくなったよ」

トミーが両手で頭をかきむしりながらいいました。

『わかってくれたかな？』

「そ、そりゃあね、・・・、ね、バーバラ、トミー・・・」

「う、うん・・・」

「まあ、なんとか・・・」

3人は、お互いの顔を見合わせて、レタを傷つけないように言いました。そして3人が過ごす部屋を決めるのですが、今度は部屋のとり合いのけんかが始まりました。

『だからエイミーの隣の部屋はあんたにしなさいよ』

『オレッチ、やだよあんなの』

「・・・」

エイミーは言葉が見つかりません。

『あたしたちが先に見つけたのよ』

どうやら家の裏の畑にある納屋と、使わなくなった馬小屋のとり合いをしているようです。

「なんか複雑そうだからあたしたちが間に入らない方がいいみたいね、エイミー」

「そ、そうね、バーバラ・・・」

結局、トナがトマト畑にある納屋を、デコが使わなくなった馬小屋を、レタがエイミーの隣の客室に泊ることになりました。

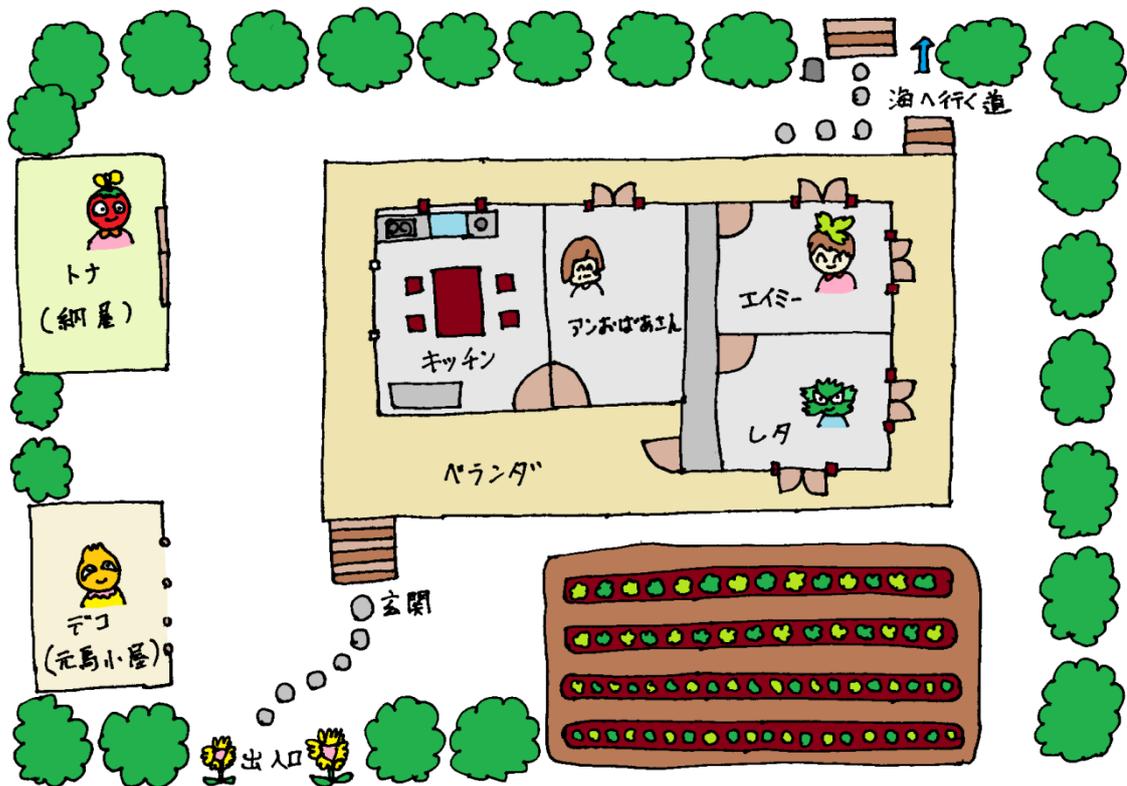
『ちえ、結局オレッチはいつも損な役割ばかりだもんな』

「あのお、お言葉ですが・・・レタ君の部屋が一番いいんですけどお・・・」

『トミー、男同士だからってそんな慰めを言わないでくれないかニ。ショックも大きいだニ・・・』

「・・・」

トミーも言葉がありませんでした。



マインドウェーブの訓練開始

翌日、バーバラとトミーはまたエイミーの家にやって来ました。

「レタ君たちって本当に大丈夫かなあ？昨日のあんな風で・・・」

トミーは少し心配そうです。

『なに遠慮してるの？さあ、入ってちょうだい』

トナが言いました。

「べ、別に遠慮してないけど、こ、この納屋に入れって言うの？」

バーバラはおそろおそろトミーを先に行かせ、トナの借りた家の畑の納屋に入りました。エイミーとフレンズたち3人はフレンズワールドから持ってきた直径1メートルくらいの切り株の机を囲み、草を敷きつめた土間に座っています。

「あら、いがいといい香りね」

バーバラが辺りを見回して言いました。フレンズワールドに初めて着いたときに、すがすがしい春の香りを感じ取ったのでした。

『そうよ、バーバラ。これが春の色の香りなのよ』

トナが言いました。

『さて昨日はけんかしてオレッチが大人になってみせたんだが、まず何をするのかトナに説明してもらおうだニ』

『それでは説明するわね。1つの調査はクラウシア研究員が行っている、マインドウェーブの調査トナ』

「なに？マインドウェーブって？」

トミーが質問しました。

『マインドウェーブというのは喜びのエネルギーよ。それがトナト
ンでは今、負のマインドウェーブになっているトナ』

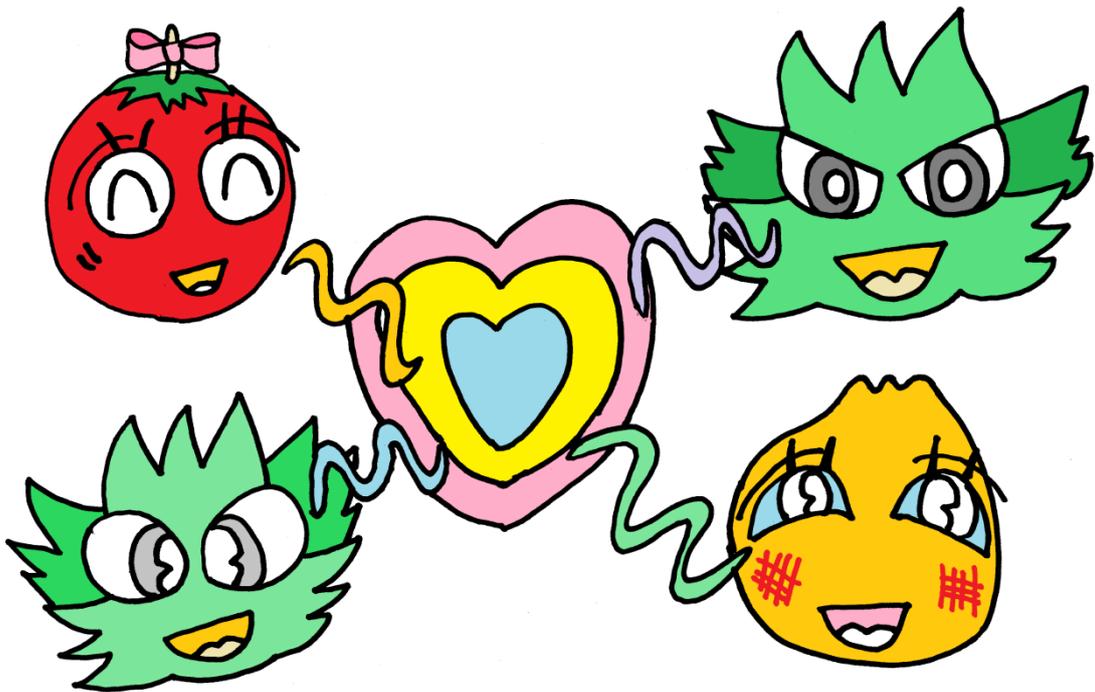
「トナさん、そのマインドウェーブがどうしたの？」

バーバラも質問しました。

『マイナスだから喜びの反対になるのよ』

「反対ってことは・・・悲しみってこと・・・？」

エイミーも質問しました。



『そう。だからフレンズワールドで問題が起こっているトナ』

「喜びの反対はわかるけど、おいらますますわかんないや」

『トミー、マインドエネルギーは生命の本当の源なんだニ。ヒューマンは石油や原子力をエネルギーにするけど、フレンズはマインドをエネルギーにするんだニ』

「もっとわかんないや。虫の話といい、なんとかと天才は紙一重ってやつだね」

『そこでヒューマンのマインドウェーブを調べたいトナ。子供の頃大きかったマインドウェーブも大人になるとだんだん小さくなっていくトナ』



「フレンズの例の教科書にも載っているの？」

バーバラが質問しました。

『教科書にはそれが発見されたって書いてあったポン。ただそれだけなの。だから調べる必要があるポン』

デコが答えました。

「そのマインドエネルギーは、私たちも持っているのかしら？」

『エイミーたちにもあるトナ。これを使うことができれば、エイミーは笛が吹けるはずトナ』

「私のお絵かきは？」

『もちろんできるトナ、ねっ、デコ』

「じゃあおいらの頭もよくなるってのかい？」

『そうポン』

トミーがまたダテメガネを取り出して言いました。

『オレッチのように部屋を譲るやさしさは、マインドウェーブのおかげなんだよ。トミーも未来を変える男になるかもしれないよ』

「昨日の場合、マインドウェーブがなくてもレ、部屋を譲るよ、きつと・・・」

『それじゃあ、さっそく、みんなのマインドウェーブを測ってみるわよ。部屋を少し暗くするトナ』

トナはそう言って、目をつぶりました。そうすると部屋が全体的に暗くなってきました。そういえばこの納屋の窓はフレンズワールドから持ってきた光るコケのむしろで覆われています。

『みんなにあげた小さな木をだしてちょうだい』

「小さな木？この木のことかしら？」

「持って来いって言ったから筆といっしょに持ってきたわよ」

「もちろんおいらも持ってきたよ」

『そうよ。それを机の上に置いてちょうだい』

トナはそう言うと、デコは同じ小さな木を自分の前に置きました。みんなと同じようにコップの大きさくらいの小さなポットに植えられています。

『訓練はこの植物とお話しするところから始めるトナ。デコ、やっ
て見せて』

トナがデコにお願いしました。

『ほら、よく見てポン』

デコは目をつぶり、小さな声でその植物に話し始めました。

『こんにちは・・・』

デコは静かにいました。

【なにしてるのかしら？】

『こんにちは、デコよ。少しお話ししてちょうだい』

するとその木はボーっと少し



光り始めました。

「あ～～～っ、光ってる」

トミーがびっくりして叫びました。エイミーも、バーバラもじっとその光っている木を見て目が離れません。

『ハハハ、みんなの前で少し勝手が違うわね、トナ』

「じゃあエイミーからやって見せて。自分の前の木さんたちに」

【なぜこの木とお話をするの？】

エイミーはそう思いながらもデコのように話かけてみました。

「き、木さん、こんにちは」

『そう、がんばってね』

「こ、こんにちは、エイミーです」



「アハハハハ、小さな木に話すなんて、なんか笑っちゃいそう」

トミーはエイミーが真面目な顔で植物に話しかける姿を見て、つい笑ってしまいました。

「あいたっっ・・・！ なっ、なんだよお～～」

トミーの前の小さな木から何やら飛んできて、トミーの顔にあたりました。

『トミー、静かにしていないと痛いことになるポン』

デコがその植物を指さしていいました。トミーの小さな木から小さな種が飛んできたようです。



「な、なんなんだよお～～、もうだまっているよ～～～」

日曜日のお昼過ぎから夕方過ぎまでかけて、3人はこの小さな木と少しはお話ができるようになりました。小さな木も光って、3人の話しに受け答えしていたようです。

「だいたいうまくいってきたな。トミーもこの木に、なんとか信用してもらったようだ」

レタがトミーの顔を見て笑いながらいいました。

「なんだよ、おいらも一生懸命やってるぜ。だってまだ子供なんだから・・・」

『ハハハ、ごめんごめん。こころの木は言葉と同じで子供の方が速く覚えるんだよ』

「こころの木っていうの？」

エイミーとバーバラがたずねました。

『そう、その小さな木はこころの木って呼ばれているトナ』

「それでさ、トナさん。そのこころの木は一体何をするものなの？」

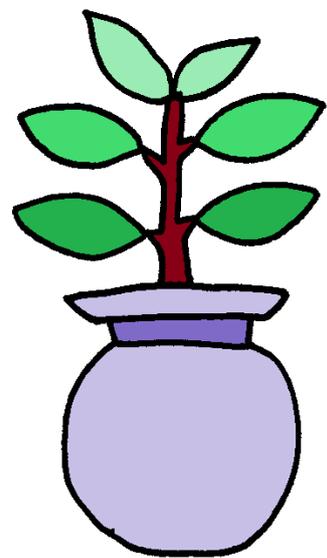
『こころの木はフレンズ同士だけでなく、アニマルズやバグズとお話をするために使われるものなのよ』

「電話のようなものなの？」

『そうよ、エイミー。でも誰でも使えるわけではないわ。自分の心をみがいて練習をしなければ使うことはできないポン』

とデコが言いました。

「心をみがくなんてカッコいいけど、わたしたちにそんなことはできるのかしら？」



『バーバラ、だいじょうぶよ。そのためにあの王冠を渡したのよ』

「えっ、お、王冠？」

『持ってきたでしょ』

そうトナがそう言ったので、3人はバッグからその王冠を取りだしました。

「これをどう使うのかしら？」

バーバラがたずねました。

『これは簡単だよ。こうしてかぶるだけでいいんだ。そうすると自分の周りのことをもっとよく考えるようになるんだ。心が落ち着いてマインドウェーブも大きくなるんだよ』



『こころの木と王冠ともうひとつは何かわかるかしら？』

「・・・わからない・・・」

エイミー、バーバラ、トミーの3人は口々に言いました。

『それはあなたたちに渡したそれぞれの物よ』

「笛？」

「あたしは絵の筆？」

「おいらの真っ白な本？」

『そう。それはみんなの力という個性トナ』

「こ、個性・・・？」

3人は個性と言われてもあまり意味がよくわからないので、ぽかんとしています。

『個性というのはみんなの性格やもっている力のことかな？その力を人のために使うことによってもっと大きくなっていくトナ』

そうトナが言いますが、3人はまだ小学生です。それでもなんとなくわかったのかわからないのか、重要なことだとは理解して元気よく言いました。

「うん、よくわかったから、がんばってフレンズの国をきっと助けてみせるよ」

スイカの帽子を作ろう

『でもねえ～～～、なんか、足りない気がするんだわねえ』

トナがデコにいました。

『トナ、なにが足りないって？』

『だってそうでしょ、いくら調査したって対策がなければ何も変わらないわ？』

『そうそう。【敵を知るにはオナラをしろ】って教科書にもあるに』

『そ、そうね。でもオナラって何のことかしら、レタ』

『オ、オラッチ、し、知らないし・・・』

『えへん、あたしは知ってるポン』

『デコ！』

『それは相手のことをよく知らないと対策も何もできないってことポン。えへん・・・ポン』

『へえ～～そうなんだ。ところでオナラってなに？』

『知らないわ。でも何かとっても素晴らしいものらしいポン』

レタは同じレタ連邦から来たマインドウェーブの専門家クラウシアのいる雑木林に来ていました。

『正直言ってまるで足りないにゃあ』

『なんだ、クラウシア。それならそうと始めに言ってほしいにゃあ、いやほしいニ』

『でもないよりはましかにやーと。実際にはこの10倍、いや100倍の量がないと、マイクロ重力との関係はわかんないにゃあ～～』



『トナとデコに相談して、もっと多くのマインドウェーブがいつぺんに手に入る方法を考えるにゃ、いや考えるからニ』

レタはエイミーの家に戻りトナとデコに相談しました。

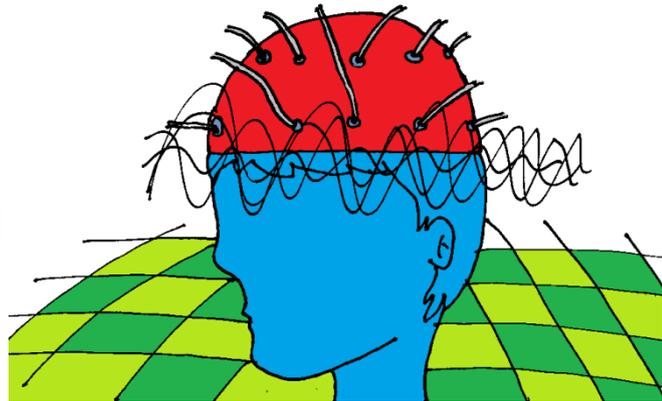
『そうねえ、オナラの件ではレタとデコに1本とられたから、あたしもあれから考えていたトナ』

『トナは一生懸命教科書を読んでいたポン』

『そこでみつけたのよ。これはヘルメットかぶって、心を読む装置トナ』

『ちょうどボクたちみたいな小さな生物がヒューマンを横に寝かせて、頭に何かをかぶせているところだニ』

『【SF:宇宙人の地球征服】
ってあるポン』



『おそらく私たちみたいにヒューマンを助けに来たのね、デコ』

『ヒューマンの過去の歴史の事実なんだろうね。すごいやトナ。さっそくクラウシアに教えに行こう。トナ、ありがとうニ』

『いいえ、どういたしまして』

レタはまた雑木林に戻ってきました。

『なかなかいいアイデアと思うにゃあ』

『ほ、本当かニ？』

『バーバラの王冠を帽子に変えればいいにゃあ』

『手で持たなくてもいい帽子にすれば、相手は楽だニ』

『帽子は何 100 人にもかぶせられるから、多くのマインドウェーブが集まるにゃあ。心の木で集めるにゃあ』

『ヘイ、ユー、レッタチン?』

『あっ、サーヤ。どうしたの?』

『どうしたもこうしたもないよ。ミーが材料を捜しに毎日空を飛んでんじゃないヨ〜』

『あっ、そうかそうか。ありがとう。で、なにか見つかったニ?』

『実は昨日、近くにいい材料があるのを見つけたサーヤ。ヒューマンに見つからないように、ミーがスカイブルーと一緒に行って採ってきたサーヤ』



サーヤはいろいろと採集した帽子の材料になるものを雑木林の中に並べていました。そこには縦じまの太った人用のパンツもありました。

『これはなにかニ?』

レタはそのパンツを指さしていいました。

『ヒューマンの帽子だサーヤ。参考にするサーヤ』

『ありがとう、サーヤ。さすがだニ』

クラウシアはパンツの横にある麦のワラの帽子を手にとっていいました。

『縦じまの帽子もいいけど、これにスピリアンをうまくふりかけたらいいにゃー』

『この2つを持ってエイミーたちにも聞いてみるニ』

翌日、レタたちは夕方、トナの納屋の前の外の畑に集まっていました。そこへエイミーたちが学校を終わってやってきました。

「あ～～あ、はらへったなあ」

入ってくるなり、トミーがそういいました。

「あんた、アホっ・・・ぐう～～～」

バーバラがトミーを叱りましたが、自分のおなかも鳴ってしまいました。

「あはははは、そういうと思って、ここに用意しておいたよ。さあ、暖かいうちにお食べ」

トミーとバーバラが来るって聞いていたから、アンおばあさんが3人にパンケーキを作ってくれました。みんな、少しおなかが膨れてホッとしました。



「すげえ。おばあさんって料理が得意なんだね」

『こっちの帽子がいいトナ』

トナが縦じまのパンツを手にとりていいました。

『帽子がたためるところが便利ポン』



デコも同じようにうなずきました。

『だろ！この麦の帽子は大きすぎてカッコ悪いニ』

『エイミー、バーバラ、どう似合うトナ？』

トナはそういって、縦じまのパンツを自分の頭にかぶって言いました。

「そ、そりゃあね・・・ねっ、バーバラ・・・」

「えっ？あ、あたしにふらないでよ・・・。そ、そうね、とってもよく似合うわ」

『あっ、だめだよ。今度はオラッチが先に見つけたんだから、それはオラッチのだニ』

『あっ、するい。じゃあトミーにあげちゃうトナ』

トナはそう言って縦じまのパンツを頭から脱いでトミーに渡そうとしました。

「い、いいよ、おいらは。今度はレタ君にあげたらいいよ。おいらはそっちの麦わら帽子でいいよ」

『そう、じゃあ今回はレタにあげるトナ』

トナはそう言って縦じまのパンツをレタに渡しました。レタはそれを手に取り頭にかぶりました。

『トミー、ありがとう。どう似合うかニ？』

「お、お礼はいいよ。レタ君、と、とっても似合うよ・・・」

「・・・」

エイミーもバーバラも声が出ませんでした。

「でもどうしてこれでクラウシア君が助かるのかな？」

トミーがレタにたずねました。

『こころの木の成分はスピリアンっていうんだニ。それがマインドウェーブを伝えていくのさ』

『やさしく声をかけると、うれしくなって光を出すのよ。その光は私たちの体に当たると、とっても気分が落ち着くの。頭にあたるから頭もよくなるわ』

トナは3人にそう説明しました。

「そ、それって、おいらにもできるかな？頭の良くなるの？」

トミーが身を乗り出して話しました。

『その通りよ。頭がよくなるってことは、落ち着いて集中してるってことなの。そうする、バラバラだったマインドエネルギーが、自然に増幅されて頭の回転が速くなるのよ』

エイミーもトナの説明を聞きましたが、あまりよくわかっていないようです。

「トナさんたちって頭がいいのかどっちかわからないね」

トミーがいました。

「まあ、トナさんを信じでやるきゃないんで、いろいろとやってみましょ」

バーバラがいました。エイミーはスイカの帽子やTシャツだけでなく、トマトやみかん、レタスやかぼちゃなど、いろいろな果物や野菜の帽子や服をデザインしていきました。



「よし、これでバアにつくってもらおう」

エイミーがいました。

「トミーのおかあさんは、帽子作りがうまいわね」

バーバラがいました。

「おいらのおっかあには、帽子を頼んでくるよ」

トミーも自慢げです。いろいろなデザインを持ち帰り、おかあさんに作ってもらうことになりました。今日は水曜日です。明日と明後日の2日をお使って、お母さんたちは帽子や、Tシャツやパンツを作り上げました。

スイカの帽子の秘密

「おっとうに、昨日この帽子をかぶせてみたんだ。酒飲んでバカばっかやっていたので、かぶせたんだ。そうしたそのまま寝ちゃったよ。それで、朝起きたらとってもいい夢を見たんだって。そうしておいらにおこずかいをくれたんだ」

トミーがエイミーとバーバラに話しかけました。



「そう、不思議なすごい帽子なんだよね」

それもそのはずです。実は本当はすごく難しい、自然との共生技術なのだそうです。簡単にいうと、望んでいることができるようになるということです。イライラしている人には、リラックスするマインドウェーブが、頭をよく使う人には、頭の回転が速くなるマインドウェーブが出てくるのです。そう望むことが大切だといいます。

今日は土曜日で学校はお休みです。実際にできた商品を買ってみることにしました。マロン村の市場の噴水の前ではエイミー、バーバラ、トミーたち3人にアンおばあさんが付き添って、いつものトマトを売る屋台で、今度は帽子を売っています。

「さあ、見てってよ、一度見たら買わずにはられないよ。いったんこの帽子をかぶったら、気持ちよくてもう離れられないわよ。さあ、そこのお兄さん、どうかしら？」

アンおばあさんは迫力のある声で周りの人を引き付けています。1人が呼び止められ、恐る恐るかぶってみました。エイミーたちは横でじっとそのようすを見ている。

「……本当だ……。なにかこうリラックスして夢でも見ちゃいそうだ」

呼び止められた若者がいいました。他のおばあさんもそれを見て帽子をかぶりしました。

「さあさあ、このお兄さんはサクラじゃないよ。今、会ったばかりのイケメンさんだ！」

アンおばあさんはますます調子が出てきています。

「勉強ができるような気がしてきたわ。1つ買って帰ろうかしら。うちの子供にかぶせてみよう」



「おばあさんてテキ屋の女親分みたい」

バーバラとトミーは、お互いに顔を見ていいました。

「でも、本当にこんなことでなにかが変わるのかしら？」

エイミーがいいました。

「まあ、でも、おもしろそうだし、真剣にやってみようよ」

バーバラがそうやってまた今度はエイミーとトミーが顔を見合わせました。

「そうだ、州都へ行こうよ。そこでこの服をもっと売ってみようよ。そうしてもっと帽子をかぶる人を増やすんだ」

突然、トミーがいました。

「そうね、マロン村でこれだけ売れるんだから、大都市にいったらきっとすごいわよ。明日は土曜で学校はお休みだから」

エイミーも、そういいました。

「あんたも、たまにはいいこというわね」

バーバラはトミーに感心しているようです。

「いいわ、あたしが連れて行ってあげよーかのお」



アンおばあさんはそうやって1つだけ売れ残ったトマトとコックローチの帽子をトミーにかぶせました。

「あんたにプレゼントだよ」

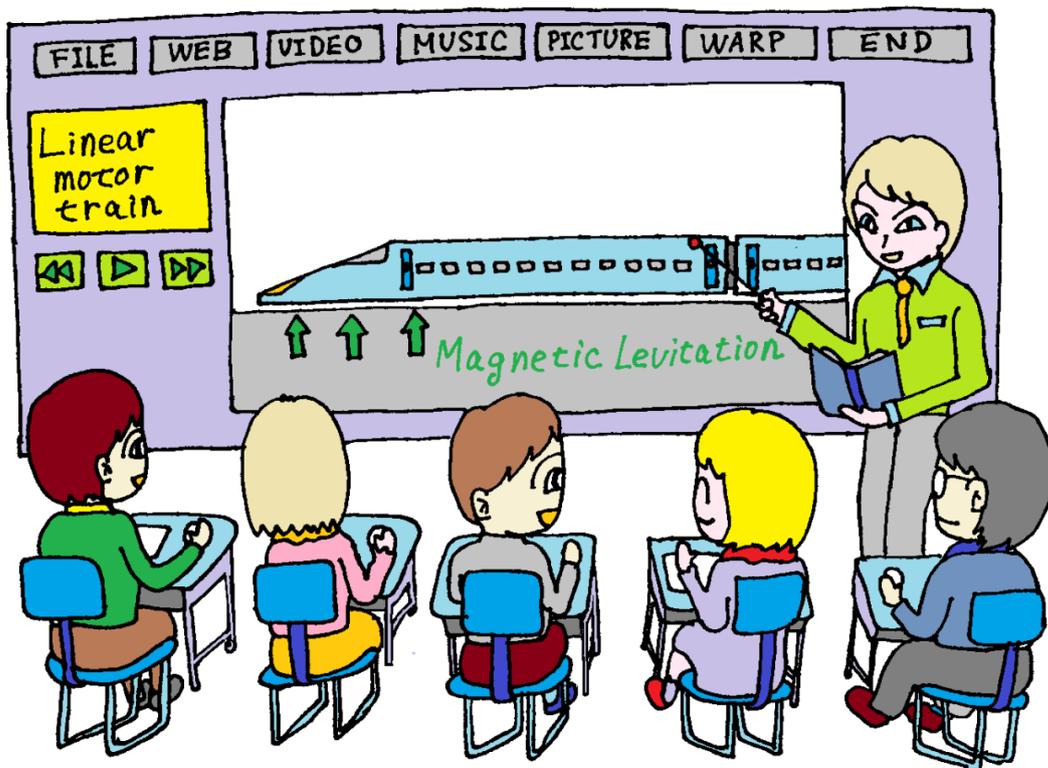
「これ、おいらのおっかあが作ったやつだよ……」

トナ、レタ、デコたちが来て、もう10日が経っていました。ヒューマニーワールドにいられる次の満月まで、後20日を切りました。

【トナトンでの異変の原因を、後20週間で見つけ解決できるのだろうか？】

エイミーはそう思いました。

ヒューマンワールドは学校で、人と競争することを学びます。大きくなっても会社の競争や、国同士の争いがあります。ちょっとしたひずみでいざこざを生むと、紛争や戦争にまでいってしまいます。ヒューマンたちはこのエネルギーに気がついていませんが、これは負のマインドウェーブで悪玉エネルギーなのです。それだけでなく、より便利な生活のために日々、エネルギーを増産しています。それ

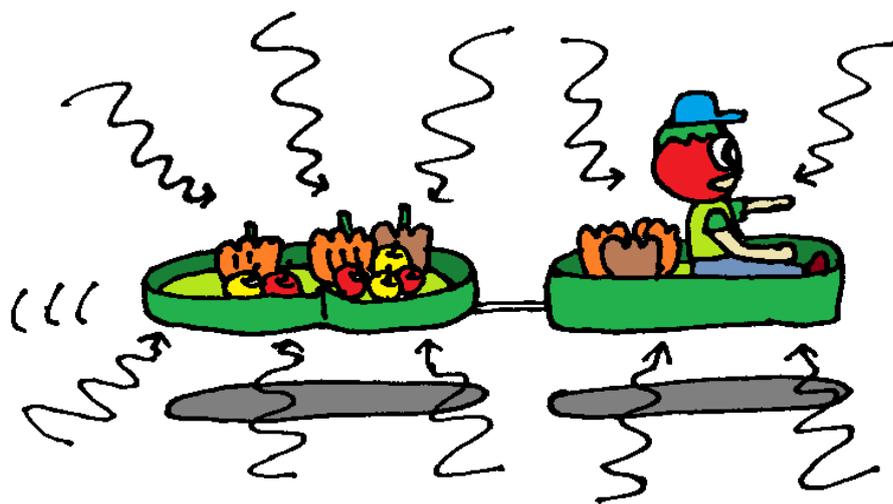


自身は必要なことでもあるのですが、使い方を考えなくてはいけな
いかもかもしれません。

一方フレンズワールドは、社会が自然と共存しています。生き物は
自然の一部であるという考えが浸透しています。マインドエネルギー
により、他の生きものの心がわかるので、あまり喧嘩が起りませ

ん。悪い細菌もヒューマニーの体に入ると、殺されると知っている
ので、彼らもマインドエネルギーを使うように進化しました。

こうして遠く離れた別の星には、いろいろな進化をした生命体がい
るようです。これからもっともっと外のことが分かると、自分が何
をしているのか、なにをすれば良いのかがわかるようになりますね。
ヒューマンとフレンズは2本足で歩き話すところはよく似ていま
すが、中身はずいぶんと違うようです。同じ惑星チターに住む2つの
知的生命は、まるで2つの別の星の世界のようです。



[ヒューマンとフレンズの比較]

比較項目	ヒューマン	フレンズ
種の存続期間	およそ 100 万年	およそ数千万年
人口	70 億人	300 万人
文明の栄えた期間	1 万年	1,000 万年
科学文明の存続期間	400 年	100 万年
寿命	85 年前後 (理論的には 120 歳)	計測データなし (数 100 年か?)